

いのちと地域を守る

知識判断運営が鍵に

自治体・企業の防災担当者が研修

東日本大震災の教訓を今後の危機管理に生かしてもらおうと、自治体や企業の防災担当者らを対象とした研修会「3・11からの学び塾」が12月19、20日の両日、仙台市青葉区の東北大学災害科学国際研究所であった。東北各地から若手を中心に集まった約40人が、座学や演習を通して災害時に求められる知識や判断力、組織運営の在り方を学んだ。

(報道部・村上浩康)

仮設建設で議論
「こんなメリット、デメリットがあるか。想像力を働かせてください」

災害研の平野勝也准教授(都市景観、土木デザイン)の呼び掛けに、3、4人で作るグループが議論を始めた。

テーマは「仮設住宅の在り方。津波で流された漁業集落30世帯の住民が身を寄せる仮設住宅をどう建設するか。候補地は集落からの距離や居住環境が異なる4カ所だ」

「漁業を再開する人は集落に近い場所がいい」「サラリーマン世代は隣の市が便利」「分散すればコミュニティ維持が難しい」

さまざまな意見が出る。各グループの結論は分かれたが、そもそも百パーセント

トの正解はない。

石巻市などの復興施策に開いた平野准教授は「時間的制約がありながら、一度決めればその後の影響が大きい。想像力、分析力、統合力が大切になる」と強調した。

学び塾は災害研と国土交通省東北地方整備局の共催で2016年度に始まり、今回が3回目。災害研の研究者、整備局の担当職員が初動対応▽災害医療▽災害法制▽業務継続計画▽復興まちづくりといったテーマを担当し、「危機管理」と「都市整備」の2コースの講義もある。

震災だけでなく、西日本豪雨や北海道地震など相次ぐ災害の実例も学んだ。丸谷浩明教授(防災社会システム)は、「避難所運営など災害時と同じであれ

災对本部の設置も演習



災害時に必要な知識や判断力を学ぶ自治体や企業の防災担当者ら

は時代遅れになる。震災の経験は大事だが、成功体験だけに頼ってはいけない」と指摘した。

緊迫した雰囲気

2日間の締めくくりは参加者全員による災害対策本部を設置する演習だ。宮城県内陸部の人口3万の市で早期に震度6強の地震が発生したと想定。参加者は対策本部の幹部として、次々に発生する事態への対応を迫られた。

▽住宅地で大規模な地滑りの恐れがある
▽県への報告と記者会見のための情報収集が必要
▽指定避難所と民間施設にできた事実上の避難所に職員をどう配置するか

同時に起きる課題に、各グループは10分ほどで回答を求められた。何を優先し、何を後回しにするかを点検し、学びにしなければならぬ。参加者が職場を持ち帰り、共有することで組織の災害対応力を向上させてほしい」と話した。

考える

伝える

2011.3.11

東日本大震災発生時、仙台市宮城野区の蒲生町内会副会長を務めていた無職片桐勝二さん(68)は、住民らと近くの小学校に避難し、津波で孤立した校舎で一晩を過ごした。リーダーとして住民の避難誘導や安否確認に当たった経験から、日ごろの訓練や情報共有の大切さをかみしめている。



片桐勝二さん

震災当日は仕事が休みで自宅に居た。津波に遭遇した。前年にあった地域の防災訓練を思い出して、揺れの後、指定避難所の中野小(震災後閉校)への避難を住民に呼び掛けて回りました。校舎には学区内の住民らが集まっていた。『落ち着いて』と声を掛け合っていると、職員室から『津波が来るぞー』という叫び声が聞こえました。皆、急いで階段を上り、皆で屋上に逃げました。約1時

孤立した校舎で一晩過ごす (仙台市宮城野区)



役立った町内会台帳



津波が押し寄せた直後の中野小(当時)の周辺
=2011年3月11日(片桐さん提供)

離れた海側から、泥が混ざった土が黒い土が近づいてきました。その後、引き波で南側の七北田川の川底が見え、血の気が引くような怖さを感じました。海と川からの波が学校周辺で渦を巻き、地域が破壊されていく。悲鳴を上げる人もいました。暗くなったころ、水位が下がったのを確認し、2階に戻りました。各教室を地区ごとに割り振り、高齢者や乳幼児には畳や布団の袋や毛布を提供。慌ただしい状況でしたが、児童らが2階の廊下に入流した泥を片付けたり、婦人防火クラブの方々が備蓄のアルフ

ア米でおにぎりを作ったりするなど積極的に動いてくれたことが忘れられません。夜、自衛隊のヘリコプターが毛布を投下してくれました。校舎には約600人が避難し、周辺では火災も発生。気が気でなく、ほとんど寝られませんでした。12日朝、救助のヘリやバスが到着し、住民らは順次別の避難所に移動。皆を送り出した午後3時ごろ、残っていた教員らとヘリに乗り、若林区の陸上自衛隊隊目駐屯地で一晩を過ごしました。その後、八軒中や宮城野体育館、みなし仮設住宅などを経て2015年、宮城野区田子地区の防災集団移転団地に移りました。避難生活では、以前からの災害対策が生きた面もありました。蒲生町内会は震災の2年ほど前、住民の緊急連絡先などの台帳を作成。会長が避難時の持参し、住民の安否や避難先の確認、支援物資の配布の連絡などに大いに役立ちました。

震災と社会関係資本

共助の連鎖を今後も

「大切なものは目に見えない」。サンテグジュペリ著『星の王子さま』に出てくる言葉である。東日本大震災において、この目には見えないけど大切なもの、人と人とのつながりや心の豊かさの重要性を実感した方は多かったことと思う。

探る

東北大学大学院経済学研究科教授
西出 優子さん



にいで・ゆうこ 大阪大副学長 公共政策大学院博士後期課程修了。東北大学大学院経済学研究科准教授を経て17年10月から現職。仙台市協働まちづくり推進委員会委員、宮城県民間非営利活動促進委員会委員、専門非営利組織論、社会関係資本論。沖縄県出身。49歳。

社会関係資本(ソーシャル・キャピタル、SC)という概念を捉えてみます。信類があり、震災でもそれ類や規範、ネットワークや絆など、目には見えないが結果型は同質な者同士のつながり、アイデンティティ形成や居場所の確保である。地域におけるSCの蓄積が、災害時のレジリエンス(回復力・強靱さ)に影響するとされる。

以上ボランティアが集った。その恩返しを、この思いが強すぎて外部者を排除する可能性も併せ持つ。橋渡し型は、異質な者同士の横のネットワークをい。行政、企業、NPOなどが枠組みを超えて緩やかにつながり、震災後の新しいアイディアを生んだ。半面、結果型や他のネットワークと生じる利害関係には配慮する必要がある。

止、安心感醸成などに成果があった。一方、仲間内の絆が強すぎて外部者を排除する可能性も併せ持つ。橋渡し型は、異質な者同士の横のネットワークをい。行政、企業、NPOなどが枠組みを超えて緩やかにつながり、震災後の新しいアイディアを生んだ。半面、結果型や他のネットワークと生じる利害関係には配慮する必要がある。

高校生が小中学生に講座

富谷高(富谷市)教諭 北郷 剛さん(26)



に支障を来した」と伝えました。強調したのは日頃の備えが自分や家族の命を守るということ。地域のハザードマップを示した上で「災害時の避難場所を知り、水や食料を準備しておく」と呼び掛けました。講座の準備を通して生徒たち自身も備えの大切さを改めて学びました。

夜間の避難難しさを痛感

社会福祉法人思恩会介護施設 石塚 慶子さん(61)



「多機能かも」は鶴岡市加茂地区の三方を山に囲まれ、一方は海に開けた地形に建っています。要介護度の低い高齢者が日中に通ったり、夜間に宿泊したりする施設です。昨秋に初めて土砂災害の避難訓練をしました。夜間に宿直が1人だけいる状況

で他の職員を呼び出し、利用者を車で避難させる想定でしたが、暗い夜に屋外に逃げるのは簡単ではないと分かりました。日中に先々の予報などを情報収集し、避難を判断しておくべきだと考えています。全国的に大雨被害が深刻化してきており、事前の備えをしておきたいです。

現場から